



原町小だより「はらまち」

川口市立原町小学校
全校児童数422名

「なかよく」「かしこく」「たくましく」

HPアドレス <https://haramachi-kawaguchi.edumap.jp/>

マスクの下はいつも笑顔です

加田 明

新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、マスクを着用することが新しい生活様式のひとつとなって1年半以上が経ちました。新規感染者数は減少傾向にありますが、マスク着用や社会的距離の確保といった基本的な感染防止対策はまだしばらくの間は続くものと思われます。

コロナ禍の学校生活しか知らない小学2年生以下の子供たちは、「学校に入学してからずっとマスクをつけているから、お友達がマスクを取った顔を見たことがない。給食でマスクを取った顔を見たら、なんか変な感じがする」という子供もいるとのこと。

私たち教職員も普段子供たちの素顔を見ることができない状態です。担任にとっては、給食や体育などが子供たちの素顔を見ることが出来る唯一の瞬間となっています。

以前、「NHKニュースおはよう日本」では、「マスクで顔が見えないことの子供の脳の発達に与える影響」について取り上げていました。

そこで京都大学大学院教育学研究科の明和政子教授は次のようなことを語っていました。

「目だけで情報が通じ合うのは大人の世界です。子供たちは表情のなかのたくさんの情報を使って、少しずつ少しずつ、相手の表情、感情というものを理解していくわけです。そういった経験が今回のコロナ禍において一気に失われていく可能性が高いです」

明和教授によると、4歳から10歳くらいの子供の脳は、「相手の視点に立って考えること」を発達させる時期だといいます。コミュニケーションを通して、相手はどう思っているのか、自分はどうのように振舞ったらいいのかをイメージする能力が芽生えてきます。

「いつもは、相手の立場に立つ経験が学校の中で豊かにあったはずですが、子供たちはどこまでそういった経験を豊かに持つことができるのかという点は、学校の先生方と一緒に考えていきたい問題だと思います」

明和教授は感情を体で表現する方法を提案しています。うれしかったら「やったー」、悲しかったら「悲しい」と、表情が見えない分、いつも以上にボディランゲージを使って、コミュニケーションを試すことも1つの工夫だといいます。

また、先日の朝日新聞の「天声人語」では、神奈川県各市役所で職員が名札の脇にマスクなしの写真掲げて市民に対応する試みを実施していることを紹介していました。「マスクの下は笑顔です。」との取り組みで、市民からは「話しかけやすくなった」「どんな人なのかわかる。」と好評のようです。

このことを学校に置き換えると、先生の笑顔は子供たちにとって、安心して学校生活を送るための大切な要因だと考えます。

われわれ大人もマスクによってコミュニケーションがしばらく状況が続きますが、学校の子供たちにとってマスクによるコミュニケーションへの弊害は深刻な問題ととらえます。子供同士、そして子供と教職員が互いに授業や学校生活の中で積極的に表情や気持ちを伝え合うことに気を配り、その機会をつくり、心の距離を近づけていくことが求められています。

子供たちにとって学校が安心して生活することのできる環境となるよう、コロナ対策とともに心の安心に心がけ、子供たちとのコミュニケーションを大切にしていきたいと思えます。

